

## 和歌山県みなべ町における観梅の成立過程

The establishment processes of plum-blossom viewing in the Minabe town, Wakayama Pref.

七海 絵里香\* 芝田 忠典\*\* 大澤 啓志\*\*\*

Erika NANAUMI Tadanori SHIBATA Satoshi OSAWA

**Abstract:** The landscape in the rural district is strongly connected with the climate in the area; in addition, the area's natural development is linked to characteristics of the available cultural resources. Therefore, we consider it significant to understand the aspects that have led to the area's rise as a famous tourist attraction, and to study its important features. In this research, we investigated plum blossom viewing in Minabe town, Wakayama Prefecture. Our research showed that cultivation of plums started during the early Edo period in Minabe town. Plum blossom viewing during this period was enjoyed not only for its visual appeal, but also for its scent. The event moved from the central plum plantation to the hillside over time. As a result, plum-blossom viewing, which promoted the area's visual beauty, became prominent. During the Taisho and Showa period, the plum plantation in Minabe town changed significantly. In particular, the plum plantation expanded via the cultivation of a superior type of plum known as "nanko-ume," and the establishment of the Minabe-Plum-Valley Development Association, which was significantly influential. Moreover, it can be said that the plum blossom viewing event, which came to be attended by the whole town, became famous because the large plum plantation in the neighborhood took the lead in creating a plum blossom viewing area.

**Keywords:** plum plantation, cultural landscape, view point, panoramic view

**キーワード:** 梅林, 文化的景観, 視点場, パノラマ景

### 1. はじめに

地域の気候・風土や開発の歴史性と強く結びついた農村のランドスケープは、固有の文化的な景観資源となりえる。これには、例えば世界遺産(白川郷・五箇山の合掌造り集落等), 世界農業遺産(掛川市の茶草場風景, 能登の里山里海等), 重要文化的景観(姨捨の棚田, 近江八幡の水郷等)等, 遺産・文化財としての評価を得ているものもある。更に, 今日のポスト生産主義<sup>1)</sup>時代においては, ツーリズムの対象としてそれぞれ固有の農村のランドスケープをアピールすることで, 観光客や交流人口の確保を図る地域も今後増していくものと考えられる。しかしながら, これらの農村のランドスケープの所謂“名所化”は一朝一夕に出来上がるものではなく, 人々の様々な努力があったはずである。このため, すでに名所化を確立している地域における景観的価値認識の成立過程を読み解く中で, その要諦を学ぶことは意義あることと考える。名所に関する研究は, 名所としての確立過程<sup>2,3)</sup>や名所景観に対する受容の変遷<sup>4,5)</sup>, 名所の行政的な保全手法<sup>6)</sup>等があるが, いずれも文献調査によるものが多く, また農業景観の名所化に関する研究は少ない。本研究では和歌山県みなべ町の産業的な梅林における“観梅”を事例に名所としての成立過程を文献整理しつつ, 対象となる梅林の分布の変遷を立地との関連を含めて考察した。なお, 観梅の名所に関しては, 月瀬梅林(奈良)の既往研究<sup>7,8)</sup>が認められた。

和歌山県は面積の約80%が山地で占められているため, 傾斜地でも営農できる果樹栽培が盛んである。中でもみなべ町は, 南接する田辺市とともに南高梅の特産地<sup>9,10)</sup>として山の斜面等に広大な規模の梅林が広がっており, 独特の景観が形成されている。この梅林は, 梅の実の生産が主目的であるが, 開花期には梅の花を楽しむ観梅の名所にもなっている。そこで本研究では, みなべ町の観梅の成立過程について明らかにすることを目的とした。

### 2. 対象地概要

みなべ町は和歌山県の中程に位置しており, 旧南部町と旧南部川村が2004年に合併した町で, 人口約13,000人(2014年4月現在), 面積約12,000haである<sup>11)</sup>。町域を流れる南部川の流域には, 下流部の沖積平地を除き広く丘陵地によって占められている(図-1)。みなべ町は, 古くから梅の栽培が推奨されてきたこともあり, 梅の栽培面積約2,000ha, 収穫量30,300t(2005年), 現在国内の約25%を占める日本一の梅の生産地となっている<sup>12)</sup>。

### 3. 研究の方法

まず, みなべ町の図書館およびインターネットによる「南部」「観梅」等のキーワード検索によって, みなべ町における梅の栽培および観梅に関する文献の渉猟に努めた。次に, 入手可能な最も古い明治末(1911年測図)の1/50,000地形図(大日本帝国陸地測量部発行)および1965年・2004年測図の1/25,000地形図(国土地理院発行)を用いて各年代の地図の果樹園の凡例を着

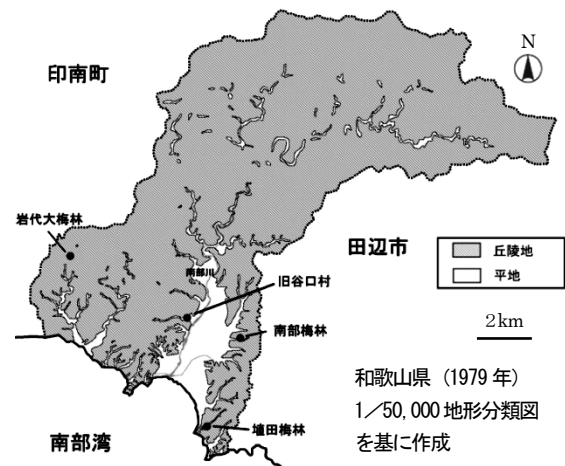


図-1 みなべ町の地形と主な梅林

\*日本大学大学院生物資源科学研究科 \*\*芝田商店 \*\*\*日本大学生物資源科学部



写真 - 1 岩代大梅林

色し、梅林分布の変遷を把握した。なお、果樹園の地図凡例が必ずしも全て梅林とは限らないが、明治末は文献の記述との整合性、以降はみなべ町における果樹園面積に占める梅林割合の高さ（1965年で約73%<sup>13)</sup>、2005年で約99%<sup>14)</sup>）から、大半が梅林と推察され、おおよその傾向は把握できると判断した。また、みなべ町の観梅活動について2014年7月に関係行政部局へ対面によるヒアリングを行った。さらに、大正～昭和初期の写真を基に、同様のアングルと思われる地点からの写真撮影を行い（2014年に実施）、現状の景観との変化を考察した。最後に、最も著名な南部梅林について、現在の観梅期の状況を把握し（2014年に実施）、南部梅林の観梅活動に関わる各セクターの役割を整理することで観梅を支えている仕組みを考察した。

#### 4. 結果・考察

##### (1) みなべ町の観梅梅林の概要

現在、みなべ町では、観光客向けの「観梅」梅林が2つある。晩稲地区の南部梅林と岩代地区の岩代大梅林で、それぞれの観梅協会（梅の里観梅協会、岩代大梅林観梅協会）が観梅活動を担っている。南部梅林は、田辺市との境にあるなだらかな丘陵の斜面に見渡す限りの梅林が続いている。厳密な範囲は定められておらず、当地域一帯の梅林を指している。約80,000本の梅が植えられているとされ、現在「一目百万、香り十里」と称されている<sup>11)</sup>。梅は全て産業用（梅干し、梅酒等の加工用）であり、本来は観光用ではないが、地元の農家の好意によって開花期には梅林が解放されている。観梅期（1月末～3月初め）には、観光客は入園料を払い、設定された約3kmおよび4kmの散策コースに沿って歩きながら観梅を楽しむ形態である。一方、岩代大梅林は、みなべ町の南西に位置し、丘陵地を平坦に造成し整備された約30haの土地区画に、約20,000本の梅が植えられている（写真-1）。その白い絨毯を駆け抜けたかのような梅林は「日本一の大パノラマ」<sup>11)</sup>として、開花期には入園料付きで観光客向けに開放されており、車で梅林を回るコースも設定されている。入園料の徴収は、南部梅林は1965年から、岩代大梅林は1995年から、それぞれの観梅協会が行っており（表-1）、年ごとの梅の開花状況により左右されるものの、近年の年間来園者数は南部梅林では約30,000～47,000人、岩代大梅林では約3,000～9,000人となっている<sup>15)</sup>。

##### (2) みなべ町の梅の栽培・観梅の変遷

文献およびヒアリング調査で明らかとなった観梅の歴史について表-2にまとめた。

##### 1) 江戸期の梅林

みなべ町における梅の栽培の起源は、江戸時代初期にまで溯る。すなわち、痩せた田畑に苦しみ農民の負担軽減のため、当地を治める田辺藩主 安藤直次（1555-1635）は以前からあった「やぶ梅」に注目し、痩せ地でも育つ梅を植えさせたこととされ、これがみなべ町での梅の栽培の始まりとされる<sup>16)</sup>。この「やぶ梅」は、日高郡の温暖な気候の下、庭等から逸出した梅の野生化個体群と考えられる。なお、みなべ町を含む和歌山県南部の最も古い産物記とされる紀州産物帳（1735）<sup>17)</sup>には、7種類の梅が記されている。

表 - 1 ヒアリング内容と回答

質問内容	回答・対応
観梅活動への町としての支援等	観梅協会への助成金提供、大阪・京都・名古屋への梅林のPR活動、南部梅林内の公園およびトイレの整備
観梅梅林で入園料を取り始めた年	南部梅林は1965年、岩代大梅林は1995年
観梅梅林の観梅客数	年間観梅客数の推移に関する統計資料提供
観梅梅林の観梅期の活動団体	・南部梅林は梅の里観梅協会、地元青年団、商店組合（地元住民により組織） ・岩代大梅林は1995年に地元青年団が実行委員会を組織し、2003年に岩代大梅林観梅協会が発足
南部梅林における観梅協会、地元青年団、商店組合の役割分担	・観梅協会は宣伝ポスターの作成、梅林内の園路の整備、梅林内のトイレの管理、入園料の徴収、梅林内の梅栽培農家への観光・通行料の支払い ・地元青年団は駐車場の整備・運営 ・商店組合は園路で売店を出店

ヒアリング先：みなべ町 うめ課

表 - 2 観梅に関する文献の記述と時代区分

年代・時期	出来事・記述	引用	時代区分
<b>江戸期</b>			
江戸時代初期	田辺藩主の安藤直次が「やぶ梅」を痩せ地に植えさせる。みなべ町における梅栽培の始まり。	16	A
1689年頃	埴田地区で梅の加工開始。江戸に送られる埴田の梅干の樽には「紀州田辺産」の焼き印が押されるほどブランド化されていた。	16, 18, 19	
1735年発行	紀州産物帳に7種類の梅の記載。	17	
1800年代初期	紀行文に三名部（南部）浦について「民家五六家とりまきて、みな梅なり」と記される。	19	
1811年発行	紀伊国名所図会に「梅田梅林」として「往還の左右および一村ごとく梅林にして、花候には香気山野に満ちたり」と紹介される。	20	
<b>明治期</b>			
1882年発行	紀伊国日高郡南部地誌略の谷口村の項に「川ノ兩岸梅樹ヲ栽培ス、花時ノ候ニ至レハ、香芬数里ニ薫ス、古埴田村ノ梅林、盛ニ賞スル所ナリシカ近時ノ新伐ニヨリ、此地特リ遠近ニ鳴ル」と記される。	21	B
1886年頃	晩稲地区で山畑を開墾し、梅栽培が始まる。	18, 19	
1887年発行	南部村誌に「名にし当地の梅林ハ、川の東西諸共に、植え培ひし梅の花」と記される。	22	
1901年	内中源蔵が晩稲地区に4haの梅林を造成し、梅林経営を村人に広める。その後、晩稲地区に梅の加工場が立てられる。	19, 16	
明治時代末	「三鍋人会」が組織され、南部梅林の宣伝に努める。	18	
1923年発行	日高郡誌に「梅林は漸く菜園にかはりて本場は上南部村晩稲方面に移れり」と記される。	23	
<b>大正～昭和初期</b>			
1925年	「三鍋人会」の中心メンバーらによって「三名部梅溪開発組合」が設立される。その設立趣意書には「この隠れたる花と実とを併せて世に出したい、換言すれば天下無双の大梅林を名勝として広く知って戴きたく、天下無双の品質と数量とを有する梅実を名産として広く認めて戴きたい。」と記される。	24	C
1925年発行	鳥瞰図絵師の吉田初三郎が「田邊白濱温泉を中心とせる紀州の交通圖繪」を描く。	25	
1932年発行	日本園芸雑誌で南部梅林について「一目五万本と評せられるが、事実此の地の大観をほいほいし得る景勝の地である」と記される。また、谷口地区の梅林については、「到る所数百間の梅花の隧道が出現し、此の谷口の梅林を梅花海、或いは花のトンネルといふ」と紹介される。	26	
<b>昭和中期～後期</b>			
戦中～終戦直後	食糧難により梅の栽培量が大きく減少する。	16	D
1954年	最良梅品種として「高田梅」が選出される。	16	
1962年	食糧難の緩和と酒税法改正によって梅酒用青梅の需要が急増する。	16	
1965年	「高田梅」が「南高」として農林省に種登録される。南部梅林では「梅の里観梅協会」が発足し、入園料を取る形での観梅を始める。	16 ヒアリング	
1975年頃	西岩代、東岩代、西本庄、西垣内等での大規模な農業開発事業による梅林造成が進められる。	16, 19	
<b>平成期</b>			
1995年	岩代地区の青年団が実行委員会を組織し、岩代大梅林に観梅客を迎え始める。	ヒアリング	D
2003年	岩代大梅林観梅協会が発足する。		
時代区分 A: 海岸沿い観梅期(埴田地区) B: 川沿い観梅期(谷口地区) C: 丘陵地観梅期(晩稲地区) D: 町全域での観梅定着期			

その後、1689年頃から埴田地区（町南端に位置：図-1参照）で梅干の加工が始まる<sup>16)</sup>。当時、埴田の梅干は江戸で人気を博し、江戸へ送られる樽には「紀州田辺産」（隣接する田辺港より出荷したため）の焼き印が押されるまでにブランド化されていた<sup>16,18,19)</sup>。このため、埴田地区に梅が広く栽培されるとともに、埴田地区が海沿いの街道筋にあったことから、梅の花の名所として次第に知れ渡ることになる。例えば早くも18世紀初頭の紀行文に、三名部（南部）浦について「民家五六家とりまきて、みな梅なり」と記されており<sup>19)</sup>、梅栽培の定着が推察される。

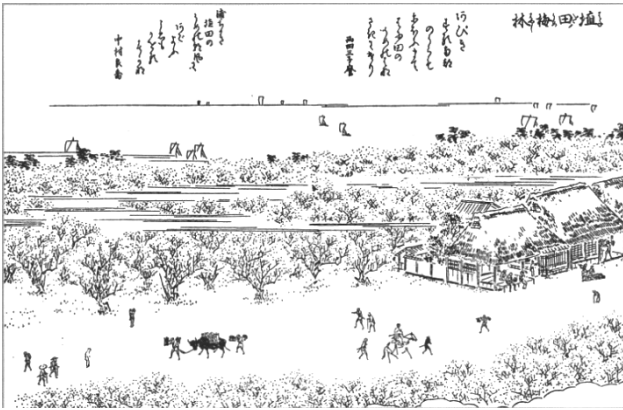


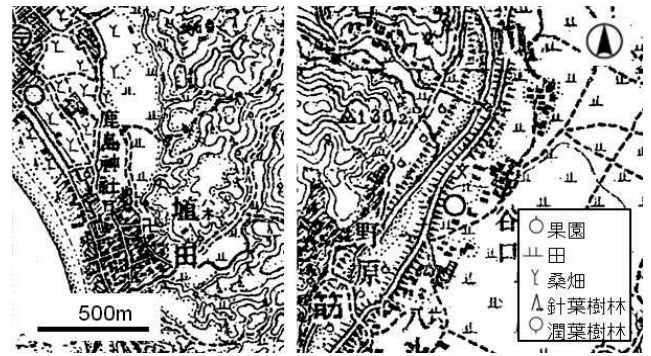
図 - 2 紀伊国名所図会 (1811)<sup>20)</sup>の埴田梅林

そして、1811年発行の紀伊国名所図会(図-2)<sup>20)</sup>では、「埴田梅林」として「往還の左右および一村ごとく梅林にして、花候には香気山野に満ちたり」と紹介される程、観梅の名所となっている。この名所図には海に続く平野に広がる梅林が俯瞰的に描かれており、「紀州田辺産」ブランドの梅干加工という経済力により、本来田畑であった低平地の農地の多くが梅林に転換されたことが読み取れる。この名所図には西田三子麿の「あびきする南部のうらもにほふまで はに田のうめのはなさきにけり」、中村良喬の「浦ちかき埴田のうめの朝風に あこよぶこえもかをる春かな」の2首も載せられている。紹介文の「香気」や挿入和歌における「にほふ」「かをる」と言った梅の香りが、視覚的な観梅に加えて重要な要素となっていたことを指摘できる。

## 2) 明治期の梅林

明治時代に入ると、国内各地で生糸産業が盛んになり、海沿いの平地に位置する埴田の梅林は、より経済力のある桑の木に植え替えられるようになる。すなわち、明治中期に発行された地誌類の「紀伊国日高郡南部地誌略」(1882)<sup>21)</sup>や「南部村尽」(1887)<sup>22)</sup>において、埴田村の項には梅林の記述は一切認められない。代わりに、「日高郡誌」<sup>23)</sup>には埴田の梅林がごとごとく切られて桑畑になったこと、「紀伊国日高郡南部地誌略」<sup>21)</sup>の谷口村の項にはかつての名所である埴田の梅は伐られて今は谷口村の梅林が有名なことが記されている。すなわち、明治期には埴田梅林が消滅し、やや内陸の南部川沿いの谷口村に梅林の中心が移ったことが示唆される。谷口村について、「紀伊国日高郡南部地誌略」<sup>21)</sup>では「川ノ兩岸梅樹ヲ栽培ス」とあり、また「南部村尽」<sup>22)</sup>では「名にし当地の梅林ハ、川の東西諸共に、植え培ひし梅の花」とある。すなわち、南部川の両岸にわたって梅林が広がっていたことが示唆される。明治末の地形図(図-3)においても、埴田地区には桑畑が多く認められるのに対し、梅林と思われる果樹園は僅かにしかない。これに対し谷口村付近では、川沿いの低平地に梅林と思われる果樹園がまとまって分布している。これに対し、山本(2004)<sup>19)</sup>は谷口村では洪水の災害が受けやすく、水田耕作に不向きな川岸を中心に梅林を植えていた可能性を述べている。当時の地形図で、川沿い以外の沖積低地が基本的には水田の土地利用となっていたことを考慮すれば、首肯できる指摘である。当時の農業の主は稲作であり、あくまで梅林は従として位置付けられ、稲作の不適地や川岸に植えられていたと考えられる。

一方、それまでの埴田地区や谷口地区の低平地の梅の栽培に対し、1886年頃より晩稲地区で丘陵地の山林を開墾する形での梅の栽培が始められている<sup>18,19)</sup>。ただし、先の明治中期の地誌類<sup>21,22,23)</sup>では晩稲村の項で梅林については未だ触れられておらず、これは当初は十数アール程度の小規模なものであった<sup>18,19)</sup>ためと考えられる。そして、1901年に内中源蔵(1864-1946)が一挙に4ha



A 埴田付近

B 谷口付近

図 - 3 明治末の埴田および谷口村付近の土地利用

(出典：大日本帝国陸地測量部(1913年)1/50,000地形図)

の梅林を造成し、梅林経営を村人に広めたとされる<sup>19)</sup>。晩稲地区が選ばれた理由としては、先の内中源蔵が晩稲の下ノ尾部落の出身であったこと、また南部川の下流域で山が低く土質が梅の栽培に適していたためと考えられる。このように、それまで山林に覆われていた丘陵地において梅林を軸とした農業経営を着想して、当地で逸早く開墾を果たした先覚者の存在が挙げられる。先の明治末の地形図においても、他の丘陵部分の多くは樹林地(地図凡例では潤葉樹および針葉樹)となる中、晩稲地区の下ノ尾集落付近のみに梅林と思われる果樹園が集中している。現在の南部梅林が下ノ尾から広まったことを裏付けている。

その後、晩稲地区に加工場が建てられ、梅の生産から梅干加工まで一貫した生産ができるようになる<sup>16)</sup>。これには1904年からの日露戦争で、軍需用の梅干の需要が高まったことが追い風となったとされる。この晩稲地区の梅林の拡大を受けて、明治末年には「三鍋(みなべ)人会」と言う有志の会が組織され、観梅名所としての南部梅林の宣伝に努めている。その活動の一環で大阪の碩学者 磯野秋渚(1862-1833)を招き、「香雲」「みかえり坂」「汐見台」等の観光的な地名を付けてもらったとされる<sup>18)</sup>。これらの地名には「香雲」には未だ香り要素が色濃く残るが、「みかえり(坂を上りきって振り向く)」「汐見(遠くに太平洋を眺望できる)」といった視覚的要素、それも高台から俯瞰するような要素が付加されている点を指摘できる。

## 3) 大正～昭和初期の梅林

1925年になると先の三鍋人会の中心メンバーらにより新たに「三名部梅溪開発組合」が設立される。この組合の設立趣意書には、「この隠れたる花と実とを併せて世に出したい、換言すれば天下無双の大梅林を名勝として広く知って戴きたく、天下無双の品質と数量とを有する梅実を名産として広く認めて戴きたい。」<sup>24)</sup>と記されており、「名勝」すなわち優れた景色を見せる観梅に対する積極的な動きを認めることができる。また、花の名所化が梅の実の販売促進と連動している点が指摘できる。そしてこの組合の事業として、最も見応えのある眺望地である香雲丘を始めとする晩稲地区の梅林付近の土地の購入、旅館または花見屋・売店などの設備経営、名産(梅干等)の製造販売等が挙げられていた<sup>18)</sup>。

この観梅活動の宣伝効果の一つであろうか、1925年に鳥瞰図絵師の吉田初三郎(1884-1955)が描いた「田邊白濱温泉を中心とせる紀州の交通圖繪」(図-4)<sup>25)</sup>には、晩稲地区の梅林に「日本一ノ梅林」とあり、既に丘陵地の相当の範囲が梅林になっていたことが窺える。特に、晩稲地区の丘陵の頂には、九十九折の道を登った先に「一目五万本」と記されており、その眺望の素晴らしさを端的に表す標語が付与されている。これは頂上から梅林が連綿と続くパノラマ景を眺望できる視点場の存在を示すものであり、三名部梅溪開発組合によって整備された「香雲丘」に相当



図 - 4 田邊白濱温泉を中心とする紀州の交通圖繪 (1925)<sup>25)</sup>  
(部分)におけるみなべ町の梅林

すると考えられる。すなわち設立趣意書には「瀟洒たる観梅亭を設置」<sup>24)</sup>とあり、当時の絵葉書にその姿の一端を認めることができる(写真-2)。これら観梅のための施設が整備されることで、当時、そこからパノラマ景を俯瞰する花見(写真-3)、すなわち観梅スタイルが既に定着していたことが示唆される。なお、当時の南部梅林の風景についての紹介記事には、「一目五万本と評せられるが、事実此の地の大観をほしいままにし得る景勝の地である」<sup>26)</sup>と、「大観」すなわちその景観の雄大さが強調されている。

一方、この交通図(図-4)には、南部川右岸の低地に「上南部梅林」として谷口地区の梅林も描かれている。谷口地区の明治末の梅林の分布状況(図-3)に加え、当時の絵葉書(写真-3)からもその梅林は川沿いの平坦地に広がるものであったことが読み取れる。そして、当時の梅林の風景については、「到る所数百間の梅花の隧道が出現し、此の谷口の梅林を梅花海、或いは花のトンネルといふ」<sup>26)</sup>と紹介されている。すなわち、谷口地区では眺望点から俯瞰すると言うよりは、「隧道」「トンネル」と形容されるように、どこまでも続く平坦な梅林内を散策して間近で花や香りを楽しむ観梅スタイルであったことを指摘できる。

#### 4) 昭和・後期の梅林

戦中・終戦直後は食糧難の時代を迎え、梅栽培どころではなくなり、一旦は栽培量は大きく減少する。しかし、1954年に最優良品種として「高田梅」が選出されるとともに、食糧難の緩和により梅の栽培が回復し始め、1962年の酒税法改正による梅酒用青梅の需要の急増<sup>16)</sup>がそれを後押しした。さらに1965年に「高田梅」が「南高」として農林省に種苗登録され<sup>16)</sup>、以後「南高梅」として高級梅干の不動の地位を確立していく。その南高梅の経済力もあり、従来の畑やみかん畑、さらに山間部の水田を埋め立てての梅林への転作が進み、1975年頃からは西岩代、東岩代、西本庄、西垣内等での大規模な農業開発事業による梅林造成も行われてきた。そして町域全体に梅林が広がる中、南部梅林では1965年に梅の里観梅協会が発足し、その頃から入園料を取る形での観梅に踏み切ったとされる。

#### 5) 平成期の梅林

1995年には岩代地区の青年団が実行委員会を作って観梅客を迎え始め、2003年に岩代大梅林観梅協会が発足した。現在、南部梅林、岩代大梅林ともに観梅期にそれぞれの観梅協会が主催するイベントが土日を中心に行われており、2014年は南部梅林では22の催し物が行われ、岩代大梅林では、14の催し物が開催されていた<sup>28)</sup>。そして現在、みなべ町は町内の梅林景観を急峻な里山を活用した歴史ある栽培景観と認識して、隣接する田辺市とともに協議会を設置し、世界農業遺産登録に向けて様々な取り組みを行っている<sup>11)</sup>。

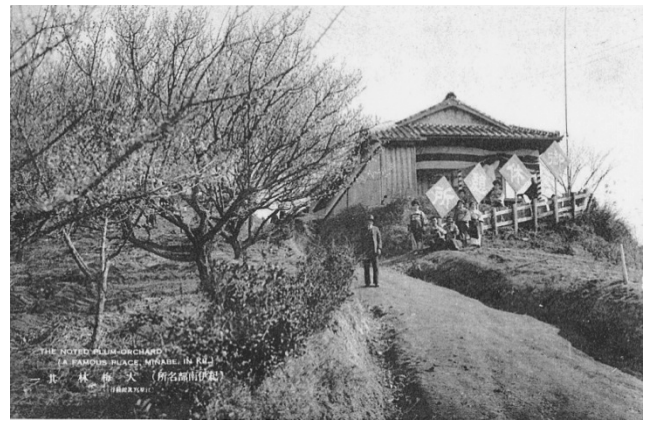


写真-2 絵葉書<sup>27)</sup>に見る香雲丘の休憩所

注：説明文には「(紀伊南部名所)大梅林 其一」とある。写真中の建物前の4枚のひし形の看板には「御休憩所」と書かれている。



写真-3 絵葉書<sup>27)</sup>にみる南部梅林

注：説明文には「紀伊南部梅林」とある。写真では判りにくいですが、右奥の丘陵稜線の先に太平洋を望んでいる。手前に観梅客を写し込むことで、心理的に画中参入を体験させる構図となっている。



写真-4 現在の南部梅林の様子 (2014.2撮影)

注：破線内は写真-3に相当する。

最後に、先の大正～昭和初期の絵葉書(写真-3・5)について、同様のアングルで現状(2014年)を写したものが写真-4・6である。まず、南部梅林の絵葉書(写真-3)では、写真手前に展望台が設置されており、そこから太平洋に続く丘陵に植えられた梅の花を俯瞰する観梅スタイルであることがわかる。一方、現状(写真-4)では、展望台は同じ位置には設置されておらず、手前の水田が宅地や梅干工場に変わっている。また、正面の梅林の



写真 - 5 絵葉書<sup>27)</sup>に見る谷口梅林

注：説明文には「(紀伊南部名所) 芳香山野を孕む谷口梅林の満開」とある。写真中央右には南部川に架かる須賀橋が見える。なお、背後の丘陵地の斜面(晩稲の字方丈付近)にも、梅林が広がるのが認められる。

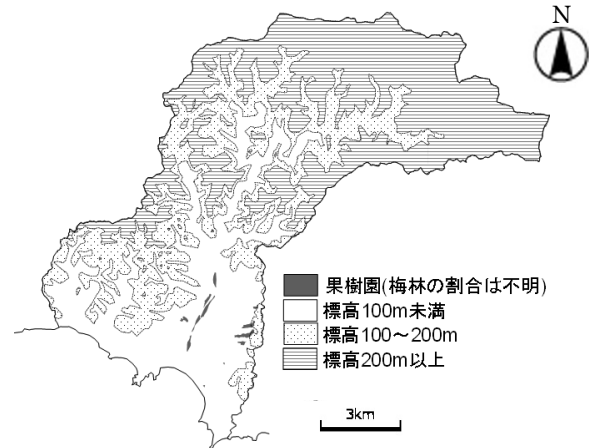


図 - 5 明治末(1911年)の果樹園(梅林)の分布



写真 - 6 現在の谷口梅林の様子(2014.7撮影)

注：破線は、宅地化が進む中、現在も維持されている梅林を示す。

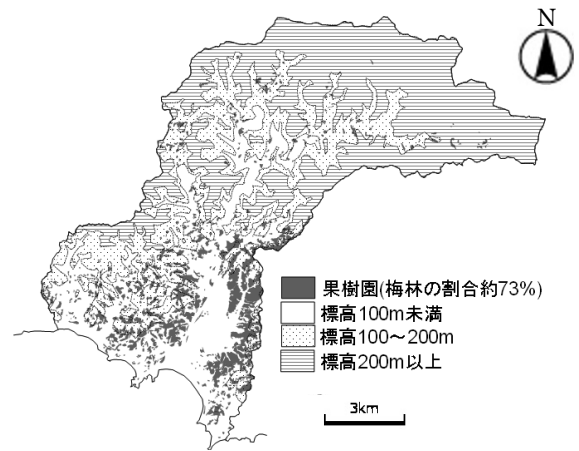


図 - 6 1965年の果樹園(梅林)の分布

中央に作業道が整備されるとともに尾根沿いの防風並木の保護育成による成長が認められる。現在、展望台は場所を変えて近傍に設置しており、眺望点から俯瞰する観梅スタイルに加え、梅林内に整備された作業道を利用して梅林内を歩きながら観梅するスタイルも取り入れられている。次に谷口梅林(写真-5)では、後背の丘陵地に広がる梅林の様子にはあまり変化が見られないものの、現状の写真では川の手前にある谷口梅林は一部を残すのみで大部分が住宅地になっている(写真-6)。この現存する谷口地区の梅林は、梅の木自体は更新されているものの、みなべ町の中で最も古くから存在する梅林と言え、規模は小さいものの、梅林の間を走る小路を散策することで往時が偲ばれる。

みなべ町の観梅の歴史的変遷は以上の様、江戸期の海岸沿い観梅期(埴田地区)、明治~昭和初期の川沿い観梅期(谷口地区)、明治~現在の丘陵地観梅期(晩稲地区)、戦後の町全域での観梅定着期に区分することができる(表-2)。観梅の中心となる梅林の立地を変えつつも梅栽培と観梅は継続され、今に至っている。

### (3) みなべ町の梅林分布の変遷

明治末(1911年)および1965年、2004年の梅林の分布状況およびその分布とみなべ町の地形(図-1)、標高との関連を見ると、明治末(図-5)には旧谷口村と南部地区にのみ梅林と思われる大規模な果樹園が広がっており、他の地区は全く分布しないもしくは小規模な分布(例えば埴田地区)に留まっている。その後1965年には晩稲地区を中心としてみなべ町の丘陵地に広範に梅林が展開しており(図-6)、戦後の食糧難緩和による梅栽培の回復と梅酒用青梅の需要増加により、経済力のある作物として梅の栽培が一気に広がったことがわかる。ただし、丘陵地でも標高

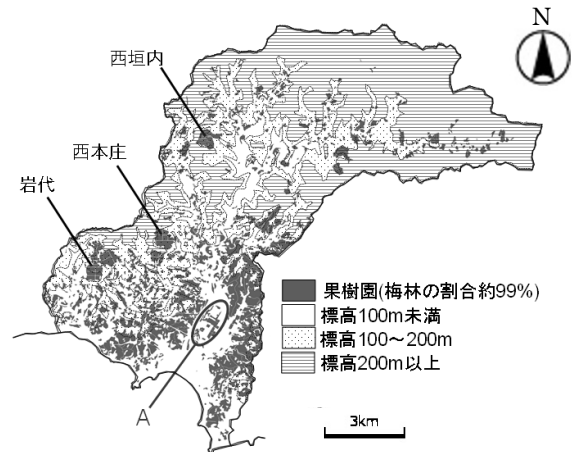


図 - 7 2004年の果樹園(梅林)の分布

200m未満の立地にほぼ限られており、低標高地の人里周辺を中心として梅林が広がっていったと考えられる。一方、2004年の分布(図-7)では、南部川下流部の平地を取り巻く丘陵地のほとんどが梅林となるとともに町全体で一つ一つの梅林の規模が1965年よりも拡大していた。また岩代地区等のように大規模な造成を伴う梅林(写真-1)が丘陵地に新たに生じていることが見て取れる。さらに、元は水田地帯であった南部川下流部の標高100m以下の沖積低地への梅林の拡大が認められ(図-7:A)、これは南高梅の経済力の高さにより稲作から梅栽培へ切り替える農家が増加したためと考えられる。

#### (4) 南部梅林の観梅活動の特徴

現在の観梅期の南部梅林の状況として、主目的である観梅行為に付随してその時期のみに開かれる施設等を把握した。その結果、駐車場、散策コース、売店の3要素が認められ、それぞれ地元青年団、梅の里観梅協会（地元有志で組織される）、地元の商店組合が整備・運営していた（表-1）。梅の里観梅協会は観梅のための散策コースを整備し、入園門で入園料を取るとともに、中程の丘陵の頂に町によって整備された公園を会場にして土日を中心に催し物を開催していた。また、入園料の収益や観梅活動に対する町の助成金の中から、散策コース周辺で栽培する梅栽培農家に対して観光・通行料として支払いを行っていた。青年団は駐車場を梅林入口に整備し、観梅期間中に人員を配置して、自家用車や観光バスの駐車に対し料金を取っていた。一方、商店組合は観梅期間中に梅林入口の駐車場から頂きの公園までの間の坂道に売店を多数出店し（2014年調査では約20店舗）、梅干や梅の苗木を始め、地元産の野菜、加工品等の土産物の販売や軽食の提供により、一定の収益を上げていた。この駐車場からこれら地元住民による賑やかな売店が左右に続く小路を徒歩で登り、少しずつ増していく俯瞰景を楽しみながら頂上の眺望点に至る、という観梅スタイルが定着していることが南部梅林の大きな特徴となっていた。そこには、観梅に縁的な要素も加わった、所謂江戸期以降の花見に通じる非日常としての祝祭空間<sup>29)</sup>が生じており、それがまた本梅林の魅力となっていた。そして観梅活動を軸に、これら地元の青年団、梅の里観梅協会、商店組合、梅栽培農家等の地元の各セクターが収益を得られる仕組みを形成していることが明らかになり、観梅活動の継続性の視点から重要と考えられる（図-8）。

今日では、南高梅ブランドの確立により町の至る所で梅林が普通に見られるようになる中、特定の場所（名所）で観梅することの意味は相対化される可能性がある。これに対し南部梅林は、梅林開墾に奔走した郷土の偉人譚も含めた「丘陵地型の梅林の発祥地・原点」であることの歴史的重要性、海まで見渡せる梅林の雄大なパノラマ景が得られる立地的優位性、明治期の「三鍋人会」以降、組織は変えつつも地元住民が主体となった観梅活動（図-8）を連綿と継続してきたことによる知名度の高さや様々な催しや出店による縁日的状況の演出等により、同町の梅林における旗艦的な役割を担っていると考えられる。

#### 5. まとめ

みなべ町では、江戸初期にはやぶ梅の栽培が始まっていたことが文献調査から明らかになった。その後、海岸近くの埴田地区で梅の加工が始まり梅干のブランド化が進むと、その経済力により農地への梅の植え付けが広まり、埴田地区が名所として知られ始めた。しかし、この頃までの観梅は、梅林景観を視覚的に捉えるというよりも、梅林内を散策しつつ梅の香りを楽しむものであった。明治に入り、埴田地区の梅林が桑畑に転換されると、梅林の中心は南部川沿いの谷口地区に移っていき、さらに晩稲地区では丘陵地の山林での梅栽培が始まった。やがて晩稲地区の梅林は拡大し、明治末には「三鍋人会」が組織され、南部梅林の積極的な宣伝がされるようになった。この頃から平面的に広がる梅林での観梅とは趣を異にする、晩稲地区の起伏に富んだ丘陵地の立地を活かして梅林を俯瞰し、壮大なパノラマ景を楽しむ形の観梅が成立したと考えられる。大正～昭和時代に入ると、南部梅林の名勝化に対する活動が更に積極的に行われるようになる。すなわち、「三鍋人会」の後続である「三名部梅溪開発組合」が花見座の運営や名産品の販売等で観光客を呼び込み、梅林を含む景観を見せる努力を積極的に行ってきた。そのため、当時晩稲地区は“一目五万本”と称される程、その壮大な梅林景観が評価されるに至っていた。さらに、みなべ町全体に梅林が広がる大きなきっかけと

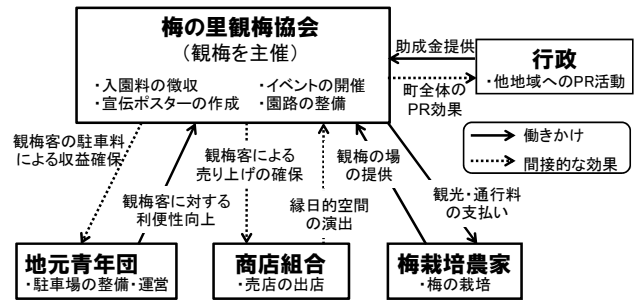


図-8 南部梅林における各セクターの関係

なったのは、高田梅の選出そして1965年の南高梅の種苗登録と言える。南高梅の優良性や経済性の高さによって、みなべ町の丘陵地を中心に梅林が広がり、岩代地区や西本庄、西垣内等の山間部でも大規模な梅林の造成が進み、町中に梅林の分布が拡大した。特に、南部梅林と岩代大梅林では、それぞれ観梅協会が発足し、入園料を取る形での観梅に踏み切り、現在多くの観光客の誘致に成功している。

今日、観梅の名所といえば、月瀬梅林（奈良）や蘇我梅林（神奈川）等、日本中にある。しかしながら梅干等の経済性により、みなべ町の梅林は他の追随を許さないほど圧倒的な規模を誇っている。そして、みなべ町の観梅の背景には、南部梅林で認められたよう地域農家が名産品として梅の生産を連綿と続けてきた歴史、丘陵地という起伏のある立地を活かした観梅スタイルの確立、観梅協会や梅栽培農家、地域住民による梅林内の縁日的な空間の演出とそれによる地元の収益獲得の仕組みが認められた。このように、みなべ町の梅林は、梅の生産量日本一という生産規模や歴史性を踏まえた独自の景観資源であることを町や地域住民が理解するとともに、観梅期には南部梅林や岩代大梅林等の幾つか観梅地の中心を持たせつつ、町全体が観梅ムード溢れる梅の里としての名所に至ったと言える。

#### 補注及び引用文献

- 1) 立川雅司 (2005) : ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容、消費される農村 : 日本村落研究会編、農文協、7-40
- 2) 小野佐和子 (1988) : 美濃池田の霞間ヶ谷桜林とその名所化 : 造園雑誌 51(5), 7-12
- 3) 小野良平 (1988) : 飛鳥山こみなる名所づくりの思想 : 造園雑誌 51(5), 13-18
- 4) 西田正憲 (2001) : 瀬戸内海における海岸景の変遷 : ランドスケープ研究 64(5), 479-484
- 5) 東口涼・今西純一・飯田義彦・森本幸裕 (2013) : 奈良県吉野山の土地利用の変遷と旅行雑誌から見た景観受容の変化 : ランドスケープ研究 76(5), 601-604
- 6) 本中真・佐々木邦博・麻生恵 (2001) : 名勝「姨捨(梅毎の月)」の文化的価値とその保全手法 : ランドスケープ研究 64(5), 475-478
- 7) 小野佐和子 (1991) : 月瀬梅林の名所化 : 造園雑誌 54(5), 31-36
- 8) 中川理沙・大濱萌子・増井正哉 (2009) : 名勝月瀬梅林における梅の景観変遷に関する研究その1 - 梅の配置と分布形態について - : 日本建築学会近畿支部研究報告集, 261-264
- 9) 水島一雄 (1981) : 和歌山県におけるウメ生産の発展と産地形成、「自然と人間の関わり」 : 澤田清編、古今書院、135-150
- 10) 橋本卓爾・大西敏夫・辻和良・藤田武弘 (2005) : 地域産業複合体の形成と展開、ウメ産業をめぐる新たな動向 : 農林統計協会、259pp
- 11) みなべ町HP : <<http://www.town.minabe.lg.jp/>>, 2014.9.22 参照
- 12) みなべ町 (2006) : DATA MINABE みなべ町統計資料編, 10pp
- 13) 農林省農林経済局統計調査部 (1967) : 1965年農業センサス 市町村別統計書 30 和歌山, 407pp
- 14) 農林水産省統計部 (2007) : 2005年農林業センサス第1巻 和歌山県統計書, 298pp
- 15) ヒアリングの際得られたみなべ町うめ課統計資料より抜粋
- 16) 南部川村うめ振興館 (1999) : 南部川村うめ振興館常設展示図録, 104pp
- 17) 盛久俊太郎・安田健輔 (1987) : 享保元文諸国産物展覧成VI 紀伊 : 科学書院, 962pp
- 18) 南部町史編さん委員会 (1997) : 南部町史 通史編2, 1268pp
- 19) 山本賢 (2004) : 三名部・南部・三鍋雑考 : 山本賢, 392pp
- 20) 加納啓平・神野易興 (1851) : 紀伊国名所図会 後編 6 : 平井五持堂, 62pp
- 21) 高島恭之助 (1882) : 紀伊国日高郡南部地誌略 : 田中正英堂, 23pp
- 22) 大江為次郎 (1887) : 南部村史
- 23) 和歌山県日高郡 (1923) : 日高郡史, 1694pp
- 24) 三名部梅溪開発組合 (1925) : 三名部梅溪開発組合創立趣意書
- 25) 吉田初三郎 (1925) : 田邊白濱温泉を中心とする紀州の交通圖論 : 観光社
- 26) 高島恭之助 (1932) : 紀州の南部梅林に就て : 日本園芸雑誌 44(1), 13-17
- 27) 熊野歴史懇話会 (2012) : 絵葉書で見る大正～昭和初期の梅の里南部 : あおい書店, 34pp
- 28) 梅の里観梅協会および岩代大梅林観梅協会が作成したパンフレットによる
- 29) 小野佐和子 (1992) : 江戸の花見 : 築地書館, 197pp